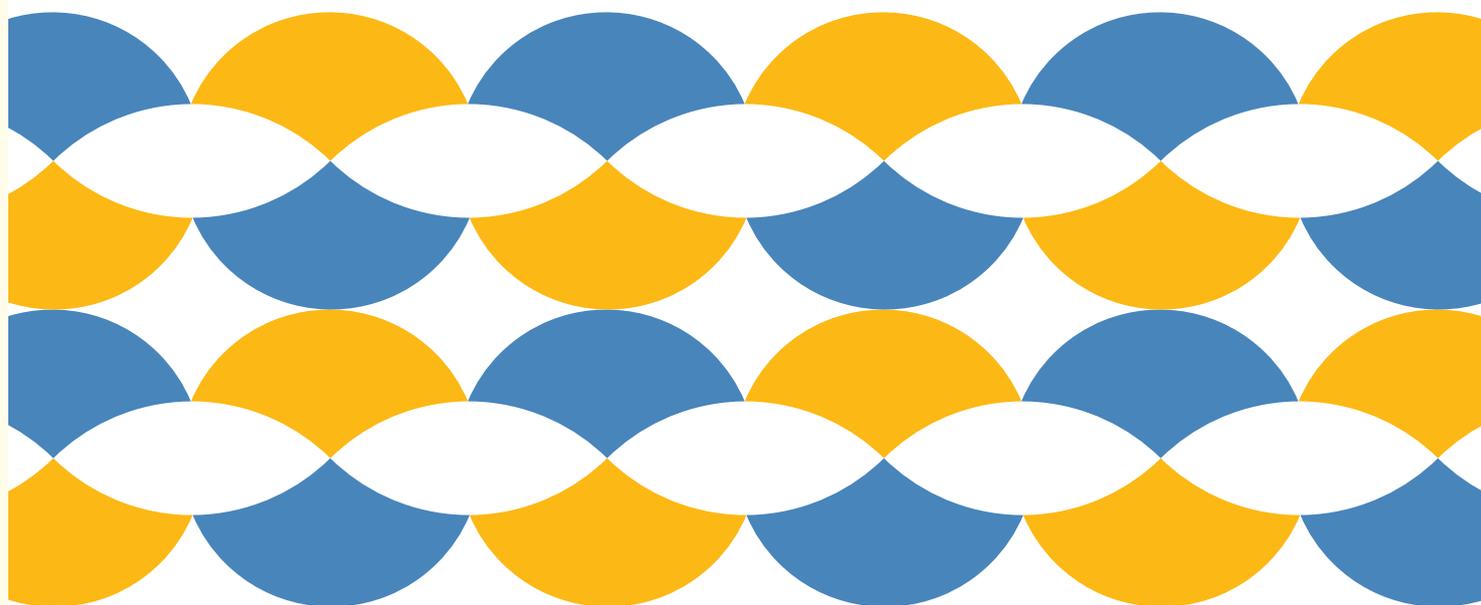


学内広報

2018.12.18

no.1517

志ある卓越。



Discover Excellence.

THE UNIVERSITY OF TOKYO



この模様は
何だろう...
変装用仮面?

→P5



「Society 5.0」を導くFSIシンポジウム・ダイジェスト

データ利活用社会のために

東京大学キャッチコピー決定!!

「Society 5.0」を導くFSIシンポジウム・ダイジェスト

FSI Symposium
The University of Tokyo

データ利活用社会のために



喜連川優 □
生産技術研究所教授
国立情報学研究所長

五神真 ●
総長

高橋誠氏 ■
KDDI代表取締役社長

石山洸氏 ◆
エクサウィザーズ代表取締役社長

「Society 5.0」はデータ利活用から

喜連川□この顔ぶれを見ると、いったい何を議論するのか、と思われるかもしれませんが、今世紀はuncertaintyでできています。何が起ころか想定できない場を協創したいと思います。ではまず一人ずつお話しください。手短に。

五神●Society 5.0に向けたデータ利活用について話します。私は、官邸の未来投資会議で日本が何に投資すべきかを議論する中、医療、農業など、あらゆる分野でスマート化が進んでいることを実感しました。IoT等により蓄積されたビッグデータをAIで活用することで、地方と都市、老若男女など様々な格差を克服し、皆が参加できる「インクルーシブ」な社会を実現する可能性が見えてきました。それには、科学技術だけでなく、技術を社会が受け入れるための、経済学、人文学など、多分野の知見と協働が必要です。東大では、SDGsを活用して、良い社会に向けたビジョンを共有し、FSIのもとで多様な連携を進めています。例えばSDGsに貢献する180以上の研究教育活動を可視化して発信しています。

近年、海外では企業が掲げるビジョン、すなわち将来の期待値に投資する「期待値ビジネス」が経済を動かしており、多くのベンチャーが育っています。しかし日本ではまだ期待値ビジネスの流れができていません。ベンチャーの持つ社会課題解決のアイデアを大学の総合力で実装につなげ、そこに投資を集めることで日本の民間セクターに眠るお金を動かせると考えています。データ活用型社会では、経済的な価値がモノから情報へとシフトします。

そこで重要な産業インフラは情報の通路です。国立情報学研究所が運用する学術情報ネットワーク (SINET) は全国47都道府県を超高速でくまなく繋ぐ世界にも稀に見るインフラです。この日本の国際優位性を活用して、これをビジネスに役立てるにはアイデアが重要。手始めにSINETで繋がる大学が参加するビジネスプランコンテストを実施したいと思っています。

高橋■「デジタルトランスフォーメーション」とよく言われますが、私はこれをフローからストックへのビジネス変革と捉えています。通信があることで商品や企業と消費者とがずっと繋がってられるこの世界は、現実空間とサイバー空間の往来が盛んな世界でもある。この文脈に繋がるKDDIの取組みを少し紹介します。ウェザーニューズとの共同事業では、約3000ヶ所の基地局に気象観測センサを設置し、そこで得た情報を集約して気象予測に役立てるサービスを展開しました。IoTを活用して進める地方創生の拠点を設け、大学との連携も行ってきました。福井県立大と鯖養殖で、琉球大とマンゴー栽培で、富山県立大とものづくりで、長崎大とマグロ養殖で……。たとえばマンゴー栽培では、環境データをセンサで取得し、それに応じた処置を施して成長を促進する実証実験を行いました。東大発ベンチャーのテレイグジスタンス社やアクセルスペース社との協創事例もあります。

最近私は「競争」と「協調」を組み合わせた「協争」という造語を用いています。競合する企業同士が、通信インフラの部分では協調をした上で、サービスの面では競争をする。データ活用でも、プラットフォームの部分で

協調した上での競争をイメージしています。

石山◆エクサウィザーズは、京都、大阪、名古屋、浜松、東京など、ご当地データサイエンティストが集結しているベンチャー企業です。地域ごとの拠点間をつなぎ、各々の地の利を活かしながら超高齢社会が抱える課題をAIで解くという事業を行っています。たとえば、介護。熟練した介護者と新人介護者のケアの様子を動画に撮ってAIで画像解析すると、アイコンタクトの使い方など、様々な点で違いがあるとわかります。この技術が浸透することにより、熟練者の優れた介護技術は新人や家庭の介護人にも還元することができます。介護だけでなく、金融、人材、医療、ロボットなどの面でも、地域ごとの強みを反映させつつAIを活用したサービスを提供しています。

日本全国「住みます芸人」の活躍

大崎◇私は内閣府の知財委員会でたまたま喜連川先生の隣に座ったのがきっかけでここにあります。先生が吉本新喜劇のファンだということもありました。吉本興業は創業106年。現在は約6000人のタレントがいます。14の劇場を持ち、ライブ制作は大小合わせて年に1万回ほどやっています。映画制作、映画祭の運営も、働き方改革に反しないようがんばっています。2011年から、全国の都道府県に芸人が移住して盛り上げていこうという「住みます芸人プロジェクト」を始めました。自治体とともに地域発信型映画をこれまでに84作品作り、映像と地元の物産品をセットにして上映しています。現在47都道府県に123人が移住中です。新規事業の多くは赤字ですが、

11月19日、未来社会協創推進本部(FSI)と政策ビジョン研究センター(PARI)によるシンポジウム「データ利活用のための政策と戦略」が、伊藤国際学術研究センターで開催されました。より良きデータ利活用社会の実現に向け、SDGsの理念を共有しながら活動する皆さんを学内外から招き、FSIシンポジウム・シリーズとして企画したものの。プログラムの最後に繰り広げられたパネル討論を抜粋してお届けします。



学内関係者11人と学外のお客様5人、計16人が登壇する大規模な集いとなった本シンポジウム。渡部教授は、産業データ政策の経緯と課題、越境するデータの取引に有効なシステム形成の必要性を述べました。吉村教授はSociety 5.0を支える電力システム実現に向けた日立東大ラボでの提言を紹介。大江教授は、効果的な医療情報のデータ収集と利活用の促進、AI-HIPLANETに言及しました。宍戸教授は、情報政策が全ての政策領域と融合するという前提の下、データポータビリティ権という新しい権利や、「情報銀行」の検討も進んでいる現状を紹介。岡田氏は「AI・データの利用に関する契約ガイドライン」やデータ・ローカライゼーション規制の潮流を解説。坂田教授は、ビッグデータがすでにある程度揃う科学技術研究がデータ利活用のよい先行事例となることに言及。古井特任教授は、健康課題の可視化による予防の取組が進み、データヘルス計画が全国で本格始動していることを紹介しました。境田理事は、東北メディカル・メガバンク機構と日本バスケットボール協会でのデータ活用事例を紹介し、日本版NCAA (UNIVAS) でもデータを活用するとの展望を述べました。中村教授はモーションキャプチャで動きを解析する研究を紹介し、卓球・伊藤美誠選手の「みまパンチ」の秘密も解説。東野教授は大阪大学ライフデザイン・イノベーション研究拠点の取組を紹介しました。最後に藤原教授が、大学はどんなビジョンを持ち、何ができるのかを社会に伝えねばならない、と述べ、8時間に及ぶ会を閉めました。



大崎洋氏
吉本興業代表取締役社長

これは単年度黒字になりました。プロジェクトは海外にも展開中です。最初は何も話せない芸人が、1年もたつと現地の言葉で笑いを取るようになり、地元TV局でレギュラーを持つ例も出ています。彼らは皆地元で可愛がってもらえていて、外から来てすぐ帰るのは違う、住むことの価値を感じます。2006年ノーベル平和賞受賞者のムハマド・ユヌスさんにもご賛同いただき、ともにソーシャルビジネスの会社も始めました。先日、芸人たちが体験した地域の課題をスタートアップ企業と話し合う場を設けましたが、SINETを使えば次の一歩が始まるでしょう。今日はSINETと5回は言えと喜連川先生に頼まれたので言っておきます。SINET、SINET、SINET。地域の課題解決への取組みをSINETを中心に進めたいですね。

喜連川 〇実は五神総長を除く3人とは事前に一応の打ち合わせをいたしました。せっかくですので、総長に質問してみませんか。

大崎 〇偏差値38の大崎から質問です。先日、上海に行きました。向こうでは、空港でもホテルでも講演会場でも、いちいち指紋や顔の認証を要求されました。もうこんなにも外国人の個人情報を集めているわけですね。いま、黒船や赤船が来ています。日本だけ行儀よくして、データ独占主義は避けられるのでしょうか。黒船や赤船と戦えるのでしょうか。

基本的な価値観を高め知恵を使う

五神 〇グローバル化が進む中で、人々の経済活動の範囲は国境を超えています。その中で、例えば個人情報の扱いなど、国によってルー

「データ利活用のための政策と戦略」

プログラム (11月19日/伊藤謝恩ホール)

オープニング：五神真 (総長)

講演セッション：データの共有と利活用

【パートI】

産業データ政策

渡部俊也 (政策ビジョン研究センター教授) ①

エネルギーデータ戦略

吉村忍 (副学長・工学系研究科教授) ②

ヘルスケアデータ戦略

大江和彦 (医学系研究科教授) ③

【パートII】

個人情報の保護と利活用の両立へ向けた法・政策の取組

宍戸常寿 (法学政治学研究科教授) ④

科学技術ビッグデータ戦略

坂田一郎 (工学系研究科教授) ⑤

データヘルス政策

古井祐司 (政策ビジョン研究センター特任教授) ⑥

データプラットフォーム戦略

喜連川優

パネル討論セッション

【パネル討論I】

個人と産業データの流通と活用：グローバル＆ローカルとオープン＆クローズ

(モデレーター) 渡部俊也

(パネリスト) 境田正樹 (理事) ⑦、宍戸常寿、

岡田淳氏 (森・濱田松本法律事務所パートナー・弁護士) ⑧

【パネル討論II】

データ活用社会創成プラットフォームと社会連携

(話題提供)

中村仁彦 (情報理工学系研究科教授) ⑨

東野輝夫氏 (大阪大学情報科学研究科教授) ⑩

【パネル討論】

(モデレーター) 喜連川優

(パネリスト) 五神真、高橋誠氏、石山洗氏、大崎洋氏

クロージング：藤原帰一 (政策ビジョン研究センター長) ⑪

司会：安藤慶明 (政策ビジョン研究センター特任教授) ⑫



photo : Izawa Hiroyuki

ルが異なることで様々な課題が生じています。こうしたルールはそれぞれの国や地域において、文化・歴史など、様々な背景のもとに出来上がってきたものです。単に共通化するのではなく、多様な個人の自由を尊重する中で、共感性の高い基本的価値観を共有しながら、協働の輪を広げていく努力が必要でしょう。

喜連川 □たとえ文化が違おうとも、根源的に学を極めた人とは通じる部分が大いだと思います。私はそうした繋がりを大事にしたいですね。さて、いまの話に繋がるような技術をお持ちの会社の方が会場にいらしています。マイクをどうぞ。

会場 ○私は、市民をどう巻き込むかという時代に入ってきていると思っています。その部分をどうデザインすればよいのか、お聞きしたい。大企業や大学が市民側にもっと近づきにはどうすべきかという話です。

喜連川 □「住みます芸人」は自ら寄っていきますが、大手通信会社としてはいかがですか。

高橋 ■IoTや5Gといった言葉を主語として語る奴は信用しちやいけな、とよく言いますが、SINETのようなネットワークに何を載せるかを語る事が大事だと思います。通信事業者はどうしてもテクノロジーから語りがちですね。アイデアを共有し、成功した事例を横に展開していくことが大事だと思います。

石山 ◆市民との関わりでいいますと、介護の世界では、みんなの認知症情報学会を作りました。研究者だけでなく、認知症当事者や市民も学会員になれる集まりです。こうした動きはSINETのようなプラットフォームがあればもっと広げられるでしょう。ちなみに、見た目が一番芸人的かもしれない私としては、芸人さんと認知症の方が一緒に取り組めることがあるといいなと思います。

大崎 ◆芸人たちは毎日舞台上に立ち、ウケると思ったところでウケなかったり思わぬところでウケたりというフィードバックを受けています。そうしたフィードバックを認知症の患者と一緒にやるのはいいことかもしれません。

SDGsへと至る道筋を示すために

五神 ●価値があるとは、それを受け取った人が嬉しさを感じるということ。吉本興業はその真ん中において、「お笑い」という形で多様な相手に価値を提供し、「インクルーシブさ」を体現していると思います。

市民を巻き込むという話では、高度経済成長期に生じた多摩川の公害問題の解決には、市民が行政に働きかけたことも重要だったことを思い出します。このように、価値が現場から生まれることを若者が体感するのが重要です。最近の若者には社会課題に取り組む機運が高いと感じます。多感な時期に東日本大震災を体験したことが影響していると思います。遠隔地をつなぐ技術の進展も、地方の現場との距離を近くするという意味でチャンスです。

喜連川 □SDGsというのはGoalであって、そこに至る道筋は何も言いません。「住みます芸人」は具体的にその一つの道筋を示したと思います。KDDIはいろいろな大学と連携して

いるとのこと。やりっぱなしで流れていくのではなくストックしていくということですね。

高橋 ■地方創生の取組みをやっていますが、一番困るのは試みが一回だけで終わってしまうこと。PoC倒れ（Proof of Concept）などよくいいますが、産官学の連携の中で、アイデアを出すだけでなく持続的に回すための仕組みを頭のいい人に考えてほしいんです。
喜連川 □その一つの挑戦がビジネスプランコンテストかと思います。それでは、最後に一言ずついただきますでしょうか。

石山 ◆AIの研究者の中には地方の出身者も結構います。彼らは地域のことが絡むとボランティアで協力してくれる傾向があるように感じます。東大やSINETの力を借りて、全国のご当地データサイエンティストをリスト化し、互いにつながれると良いなと思いました。

大崎 ◆コンテンツというと、テレビだドラマだ、となりがちですが、教育、介護、医療など、エンタメ以外のコンテンツを広げることが日本の強みになるように思います。これを機にそういうコンテンツを考えていきたいですね。

高橋 ■今日の話聞いて、IoT、5G、ビッグデータ、AIなどの上に乗せる仕組みを考えるには自分らの発想を大きく越えないといけないと感じます。先ほど述べた「協争」を、もう少し外を見ながら、産官学の連携を深めながら進める必要があると改めて認識しました。

五神 ●吉本の芸人の皆さんが世界に躊躇なく飛び立っていることに感銘を受けます。世界共通で多くの課題が山積していますが、それを解決するより良い社会の姿を日本が先導して示したい。社会課題の解決を目指す若者は増えています。日本の重要なインフラであるSINETを活用し、皆で、ともに、より良い社会を協創していきましょう。



SDGs に繋がる取組を発信する FSI シンポジウム・シリーズ

FSIやSDGsに関する取組におけるシンポジウムやワークショップなどを「未来社会協創推進シンポジウム」と位置づけ、シリーズ化することにより、各取組の効果的な発信や今後の活動に結びつけています。11月19日に続き、11月27日には東京大学・国連開発計画（UNDP）包括連携協定締結記念シンポジウムが開催されました。シリーズ申請方法などは東大ポータル・便利帳の未来社会協創推進本部欄をご覧ください。



11月27日のシンポジウムで講演する総長／@UNDP Tokyo

SDGs に繋がる研究を紹介する特製冊子配付中

180を超えるFSI登録プロジェクトから注目すべき研究をピックアップして紹介する冊子を広報戦略本部が作成しました。登録件数が多い公衆衛生のほか、都市化が進むアフリカの食事、海底に眠るレアアース資源、デジタル時代の人文学など、東大の研究の幅広さを示すプロジェクトを6つ選び、日本語と英語の両方で紹介しています。ご活用ください。



www.u-tokyo.ac.jp/ja/about/public-relations/fsi-magazine.html

東京大学

自由に使えるビジュアル素材もあるよ

キャッチコピーが決定!!

創設140周年企画として広報戦略本部が2017年7月に募集を開始し、以後慎重に審査を続けてきた日本語・英語の東京大学キャッチコピーが、このほどついに決定しました。昨年10月の140周年記念イベントで発表した優秀14作（H9・英5）をベースに、本学構成員によるウェブ人気投票の結果も踏まえ、広報戦略本部の検討チームによる審議を経て決まったのが、右の2つのコピーです。

日本語版は学際情報学府修士課程の国分峰樹さんの作品が、最優秀作として採用されました。英語版については、日本語の「卓越」と意味が近く、他の優秀作にも使われていた「Excellence」を活かしながら、検討チームの微調整を経て策定されました。選考に当たり東京大学憲章と東京大学ビジョン2020の精神が拠りどころとなったのはいうまでもありません。

10月30日には、最優秀作品賞の表彰式が行われ、広報担当の松木則夫理事・副学長が表彰状と副賞のMacBook Proを贈呈。また、企画の立ち上げから仕上げに到るまで多大な貢献をされてきた博報堂の2人のクリエイター、豊田丈典さんと藤本大生さんに、感謝状が贈られました。

2つのコピーは、ウェブサイトをはじめとして様々な場面で構成員が利活用することで、本学のブランドイメージが向上することを願って定めたものです。皆さんの卓越した発想でコピーが実のあるものになるようご協力をお願いします。

日本語

志ある卓越。

英語

Discover Excellence.



考案者が語る
日本語コピーに込めた思い



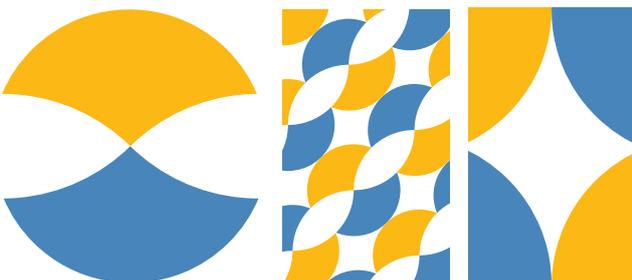
学際情報学府修士課程
国分峰樹さん

「卓越」すなわち“Excellence”は、ワールドクラスの研究大学が追求する共通価値として、現代の大学における経営・政策上のキーワードになっています。その起源は、スタンフォードを全米屈指の大学へ成長させた F.Terman が、1940年代に“Steeples of excellence”という理念を掲げたことに始まりました。今、グローバル化の潮流のなかで世界各国の大学が、世界の最高峰をめぐるしのぎを削っています。この争いにもっとも付加されなければならない大切な価値とは何か。それは「志」ではないかと思います。東京大学の日本らしさ、日本的な価値を示す言葉を、志と表現しました。東京大学が積み重ねてきた140年の歴史は、この地で学び、知の探究に懸けた人々の志とともにあります。戦前70年と戦後70年、そしてこれからの70年、東京大学が世界で最高峰の大学として、卓越した知の共同体であり続けるために、大切にすべき価値をこの言葉に込めました。

英語コピーについて

東大の中のExcellenceを発見し、また、自分の中のExcellenceを東大で発見してほしい、という思いを込めました。国際社会での東大のプレゼンス向上とブランド構築に資することを願っています。（広報戦略本部/ユアン・マッカイ）

キャッチコピーとともに活用する柄
Chain of Excellence とは?



せっかくのキャッチコピーを幅広く活用してもらうため、コピーとともに自由に使うことができるイメージパターンを用意しました。基本となる柄は、東大を象徴するイチヨウの葉2枚をシンボリックにしたもの。この柄を自由に組み合わせることで、東大に集まる「卓越」の多様性と、「志」をもって向かう未来、それらが相互作用して発展していく「知の連鎖」を表現しようという意図が込められています。

たとえば、今号の表紙のようにつなげて並べてみたり、つなげたパターン

を斜めに傾けてみたり、部分的に拡大してみたり、はたまた、自分の部局・部署にいるマスコットの顔にかぶせてみたり……と使い方はおまかせ。

誰でもウェブから素材をダウンロードして自由に使うことができ、改変もOK。使用申請は不要です（ただし、「東大マーク」とキャッチコピーを組み合わせた使用には、本学構成員による申請が必要となります）。詳しくは全学ウェブサイトのwww.u-tokyo.ac.jp/ja/about/public-relations/b01_05.htmlをご覧ください。

ひょうたん島通信

大槌発! 第47回

岩手県大槌町の大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センターのすぐ目の前に、蓬萊島ほうらいじまという小さな島があります。井上ひさしの人形劇「ひょっこりひょうたん島」のモデルともされるこの島は、「ひょうたん島」の愛称で大槌町の人々に親しまれてきました。ひょうたん島から大槌町の復興、そして地域とともに復旧に向けて歩む沿岸センターの様子をお届けします。



町の鳥がワルモノに?

佐藤信彦 大気海洋研究所 海洋生物資源部門 資源生態分野
特任研究員

各市町村では、その地域を象徴する動植物が「町のシンボル」として掲げられています。国際沿岸海洋研究センターが位置する岩手県大槌町では、「町の花／ツツジ」、「町の魚／サケ」、そして「町の鳥／カモメ」が掲げられています。初夏になると、新山高原にはツツジが咲き誇り、色鮮やかな景色を楽しませてくれます。秋から冬にかけて来遊してくるサケは、重要な漁業資源として地域住民に恩恵をもたらしています。さて、「町の鳥／カモメ」はどうでしょうか？ 実は、町の鳥として慕われるべき存在のカモメがある理由から悪者扱いされているようです。

春先、普段は漁港にたむろしているカモメ達がなぜか大槌川に集まってきました。どうもサケの稚魚を食べに集まっているようです。三陸沿岸域では、サケ漁業を安定させるためにサケ稚魚の放流が盛んに行われています。河川で放流された稚魚は、海に降りてオホーツクやベーリング海で成長します。そして、放流から3～5年経つと産卵のために三陸沿岸に戻

ってきます。この戻ってきたサケを漁獲しているのですが、ここ数年は不漁が続き、カモメが稚魚を食べることによる初期減耗が原因ではないかと指摘されています。地元では、カモメが「サケを減らす悪者」として認識され、駆除を求める声も上がっています。

我々は、カモメ達が本当にサケ稚魚を食べているのか、そしてその食べる量はどれ程なのかを調査しました。調査の結果、カモメ科のカモメとウミネコがサケ稚魚を食べていることが分かりました。多い時は、150羽近いカモメとウミネコが大挙しており、その光景は圧巻のものです。確かに、この光景を目の当たりにするとカモメ達を悪者扱いしたくなる気持ちが理解できます。ところが、じっくり観察してみるとカモメ達の餌取りはあまり上手くはなく、1匹のカモメが1時間あたりに食べるサケ稚魚の数は、平均2～3匹ほどでした。数理モデルを駆使し、放流期間にカモメ達が食べるサケ稚魚の総数を推定すると、大槌川での放流匹数に対してわずか0.25%程度という結果



大槌町のご当地マンホール。「町の花／ツツジ」と共に「町の鳥／カモメ」がデザインされています（岩手県下水道公社のクリアファイルを撮影）。

になりました。カモメによるサケ稚魚の食害は、サケ不漁の大きな原因にはなっていないようです。

この調査から、「サケを減らす悪者」というカモメ達の汚名を返上することができました。しかし、調査のためにGPSを背負わせたり、採血したりする私はカモメ達から悪者扱いされ続けるのでしよう。

調査船 弥生のつばやき

小学生からの手紙



国際沿岸海洋研究センターの調査船「弥生」と申します。皆様のご支援による竣工から早5年が経ちました。私の業務は沿岸海域の調査・観測ですが、センター界隈の最新トピックをお伝えするこのコーナーも担当しています。

先日、一通の手紙を目にしました。差出人は大槌町の小学4年生。そういえば、新センター完成式典のあった7月20日の午前中。来賓の受け入れ準備にてんてこ舞いの事務職員を尻目に、センターのエントランスにゴロリと寝転ぶ小学生の姿がありました。大槌学園の「ふれあい体験」という授業です。視線の先はご想像の通り天井画「生命のアーキペラゴ」(no.1513表紙参照)。お馴染みの生き物ばかりでなく、奇妙な形のウィルスや栄養塩類の構造式、生物の遺伝情報である

DNA塩基配列など、様々な“海”が描かれています。気になるものを見つけた子供が手を上げると、作者の大小島真木さんが、それを描いた“思い”や“技術”について語ります。一方、センターの教員は、その生物や事象についての科学的な解説です。子供たちと芸術家と科学者のやり取りは、どこまでも広く、深く、無限に続いてゆくようでした。午後に行われた新棟見学会のため、岩手県知事や大槌町長、本学役員の方々がエントランスをお通りになった時、つい先ほどまで

ここに子供たちが寝転んでいたと思うと、なんだか嬉しくなっていました。「海洋生物研究所」ではないんですけどね(写真)。



制作：大気海洋研究所広報室（内線：66430）

総長室だより 第17回

～ 思いを伝える生声コラム ～

東京大学第30代総長

五神 真



「Society 5.0」が意味するところ

私たちがインターネットを利用するようになって約20年。この間に、画像センサや半導体メモリ技術は飛躍的に進化し、膨大なデジタルデータを瞬時に収集・保存できるようになりました。AIやデータ解析技術は、それらを様々な形で利用可能にし、その結果、あらゆる産業分野でスマート化が進んでいます。このデータ活用によるスマート化は地方と都市、老若男女、障がいの有無などの格差を大幅に縮小し、皆がそれぞれの能力を發揮して活躍するインクルーシブな社会を実現する可能性を持っています。これが「Society 5.0」の姿です。

これまでの経済成長を支えた労働集約型から資本集約型への移行という成長モデルは終焉し、その延長上にはない知識集約型へのパラダイムシフトが起きつつあります。この転換をインクルーシブな社会の実現へと導くには、技術革新だけでなく、それを受け入れるための社会システム、人々が意欲をもって参加できるように資金をうまく循環させる経済メカニズムが必要です。この3つの連携を主導できるのは、知恵と知恵を活用する人が集積する場である大学です。まさに今が大学の出番なのです。知識集約型社会で誰もが経済活動に参加するには、いつでもどこでも必要なデータを皆が利用できる環境が必要です。日本全土を超高速度つなぐ学術情報ネットワークSINETとそれを支える大学は、これを実現できる理想的なインフラです。各地の大学が起点となり、企業等と連携することで、データを活用した新しい産業を日本各地で生み出せるのです。

取組みの端緒として、11月19日に未来社会協創推進本部と政策ビジョン研究センターがシンポジウム「データ利活用のための政策と戦略～より良きデータ利活用社会のために」を主催し、私も開会挨拶とパネル討論で登壇しました。パネルに登壇した吉本興業の大崎洋社長の話は圧巻でした。所属芸人が47都道府県に定住して地域に根ざした発信をする「よしもと住みます芸人」というプロジェクトは大変好調で、初年度から黒字だといいます。「笑い」という価値で多様な人々の心を掴み、映像等の情報メディアで地域の良さを発信し、全国を元気にするという事業で、日本から飛び出してアジアにも進出しています。経済的な価値が物から情報や知恵・サービスに移るといふ知識集約型社会への転換を象徴する、わかりやすい事例だと感じました。

大崎社長を招待したのは、司会の喜連川優先生（データベース工学の専門家）です。話し言葉を情報学的に分析するために落語に注目し、その過程で吉本興業に辿り着いたという話も新鮮でした。パネルの様子は本号巻頭で詳しく紹介していますのでお楽しみください。

UTokyo 第11回 バリアフリー最前線!

障害がある職員のお仕事拝見⑤

ことだまくん



図書館の本の埃を落として整頓

— どんなお仕事を？

「主に図書業務です。総合図書館の本を書架から出し、ペーパーなどで拭いて埃や汚れを落として戻すという作業を3人1組で行います。埃が多いのでマスクと手袋は必須。本の天と背の間の溝は埃がたまりやすいですね」

— 作業で気をつけていることはありますか。

「書架に戻す際には背を手前いっぱいに出す形で揃えます。そのほうが取り出しやすいからです。個人的に注意しているのは、同じ失敗を繰り返さないことです。たとえば、並べる際に本を倒してしまうことがありますが、そんなときは2回目がないよう集中します」

— パソコンを使う作業もやっているんですね。

「紙でしか残っていない昔の学籍簿の情報をエクセルに入力しています。名前、学部、学科、学籍番号などの入力を必ず2回行い、両者を比べて突合し、他の人も確認します。昔の学籍簿には難しい旧字が多く、対照表を見ながらやっています。部局などから回ってくる不要書類からクリップ類を外してシュレッダーにかける仕事もあります。多すぎず少なすぎないちょうどいい枚数の紙をぱっと取り入れるのがポイントです」

— 今話していても特に障害は感じませんか。

「私は高1のときに統合失調症を発症しました。リハビリ生活を送しながら美術短大を卒業した後、作業所で働いていましたが、ハローワークで紹介され、今年3月にここにきました。東大附属病院のデイホスピタルに通い、対人関係をうまく営むための訓練を続けてきたおかげだと思っています」

— 美術短大時代にはどんな作品を？

「銅版画です。モミジの葉脈をクワガタと組み合わせた作品とか、蛇を使った曼荼羅風の作品とか。今も作りたいんですが、道具がないので無理ですね」

— そのほかで好きなことは何ですか？

「中学の体育館のカンフー道場に7年通ってました。休みの日にはゲーム音楽を聴いています。「どうぶつ森」のサントラとか、癒される音楽が好みますね」

— 東大の教職員にメッセージがあればどうぞ。

「快適な読書環境を整えようと毎日がんばっています。図書館で整頓された本棚を見たときに私たちのことを少しでも思い出してもらえたらうれしいです」

バリアフリー支援室 ds.adm.u-tokyo.ac.jp



軽作業用手袋

施設企画課 障害者集中雇用
PT業務支援班(図書館)
北川大輔さん(35)
好物:チキンカレー(レーズン入り)

ワタシのオシゴト 第152回

RELAY COLUMN

医学部附属病院
経営戦略課渉外担当 中濱拓郎

大体わかりました



近隣の方の微笑を受けながらお仕事。

私の仕事……配属されるまで、係名から寄附金を集める仕事を想像していましたが、実際は、想像外で、新規建築予定の建物に関する機器購入や移転業務についての業者・契約担当者・施設担当者との打ち合わせやスケジュール管理をする業務でした。

専門的なことについては、契約担当者や施設担当者が対応してくれますので、私自身、よく分からないまま、大体分かった感じで業務が行えています。そのおかげで、突然の難単語の質問が来た際は、冷や汗いっぱい、取り繕っています(笑)。

あと、病院は複数の建物が連結しているため、方向音痴の私には、難関ダンジョン以外の何物でもなく、いまだに同行した業者の方に案内してもらっています。(ありがとうございます……)

趣味は、ゲームですが、ゲームのレベル上げに飽き足らず(?) 現実の自分のレベル上げに格闘技、剣術をやっています。最近、格闘技の練習が厳しくなり、月曜日の朝の気分がジムに通っています♪



甲斐甲斐しくご近所を清掃中。

得意ワザ：迷子(徒歩5分を徒歩30分にしたことがあります)

自分の性格：あわてん坊(改善方法探しています)

次回執筆者のご指名：山田哲史さん

次回執筆者との関係：元医科研つながりです

次回執筆者の紹介：神出鬼没の愉快な先輩

IRデータ室
よもやま話

第11回

本部IRデータ課 矢吹史子



IRデータ室の目的と課題

このコラムも11回目となりました。順番はまだまだ先だと思っていたら、あっという間に年末になってしまい、月日の早さに驚いています。

既に触れてきたように、IRデータ室は「学内のデータを収集し、分析を行なうこと」を目的に設立され、教学・研究・社会連携・管理運営の4部門で構成されております。私は社会連携IRの庶務を担当しておりますが、今まで関わりのない分野だったため、当初は関係部署の方々にどんな活動をしているか、を説明していただくことから始めました。

IRデータ室は何か特別な情報を持っていると思われることも多いのですが、実際はそうではありません。「学内のデータを収集し」という設立目的のとおり、研究室→部局→本部→大学として取りまとめられた、既にある調査等を共有いただいています。

「学内にもともとあるデータを集める」というのはわざわざ宣言することなのか?と思う方もいらっしゃるかもしれませんが、東京大学の場合、組織が大きすぎるため、おそらく構成員のどなたも「どこにどんな情報があるか」を正確には分かっていないのです。よく寄せられる「同じことをあちこちの部署から聞かれる」という不満の声もこのあたりの事情が関係しています。IRデータ室の本来の目的とは少し離れますが、この点についても改善できればと思っています。

学内から収集されたデータは、各研究室・各専攻での事務処理一つ一つが積み重なったものとも言えます。合算し、過去の状況や他大学と比べたり、はたまた他の情報と組み合わせたりすることで、見えてくる事実があるのではないかと考えています。

もちろん個々の情報はデータ分析のために入力している訳ではなく、あくまで「○○情報の管理のため」「○○調査の回答のため」。個々の事情があり、それぞれに最適化されています。そのため、データが集まったところで、いざ、分析をしてみようと思っても、「全員がアンケートに回答してくれている訳ではありません」「部局によって記入方法が異なります」などなど…多くの場合、分析の前段階でちょっとした問題が発覚します。そうした点を一番良く分かっているのはご担当の方々であり、私たちは説明いただきつつ、事情をきちんと把握した上で活用しなければいけないと思っています。

それぞれの段階で課題があり、決して完璧ではありませんが、できるところから進めてきました。今後はより執行部・各部局のお役に立てる存在になりたいと感じているところです。

インタープリターズ・第137回 バイブル

情報学環・総合文化研究科教授
教養学部附属教養教育高度化機構
科学技術インタープリター養成部門

廣野喜幸

『なぜだろうなぜかしら』悪循環編

カルチャーセンターの講師をつとめたことがある。これには参った。大学の授業は、学生さんの反応をみて改善を重ねていくものの、講義の骨格はすでにできている。おおむね同様な内容を違う相手に話せばよい。カルチャーセンターでは、私の講座に出て気に入ってくれた方は次の講座にも出てくれる。ありがたいことに固定客ができる。大枚をはたいて出てくださる方に同じ話を聞かせるわけにはいかない。必然的に講座ごとに違う趣向を用意しなければならない。これに苦勞する。本業に差し支えそうになった時点で早々と退散することにあいた。

たとえば、サイエンス・カフェ。あるいは、科学博物館。これにも固定客ができる。これまたありがたいことに、来る人は何回も来てくださる。来ない人は来ない。科学博物館は生涯で2回訪れる人がほとんどだという話がある。子ども時分、親に連れられて行くのが1回目。親になって子どもを連れて行くのが2回めでそれが最後という次第である（高齢化時代では、孫を連れて行くので3回になっているのかもしれない）。かくて、特に日本では、関心層と無関心層にきっぱりと分かれ、中間層がほとんど存在せず、無関心層が科学技術コミュニケーションの土俵にさっぱり上がってきてくれない。この事態をどう改善していくか。裾野をどう広げていくか。これらが科学技術コミュニケーションの大きな課題の1つとなって久しい。残念ながら改善の目途は立っていない。

小学生時代、私は『なぜだろうなぜかしら』の各学年版で知識欲を満たしてきたが、中学生版はなかったため、ブルーボックスを買い始めた。堀切菖蒲園駅近くにあった永文堂で買い求めた都筑卓司（1504号での誤りをここに謹んで訂正致します）の『四次元の世界』（1969年）と『タイムマシンの話』（1971年）の2冊が私のブルーボックス事始めであった（私の中学時代は1972～1975年）。いきなり、ブルーボックスに移行したのは、中学生レベルの科学リテラシーを高める文化装置が充実していなかったためだと考えられる。

科学関心層と無関心層に分かれるのは中学2～3年生にかけてだと言われている。つまり、中学生になると潜在的購買層が減る。小学生時分買っても買わなくなる層がけっこう増えていく。売れないから、中学生向けの科学読本はつくられなくなる。ないから読めず、自然や科学を見る眼を養えないから、関心をもたない。こうして悪循環が固定化する。この悪循環は1960年頃にはじまるらしい。その辺りの経緯については、また次回。再見！

蔵出し！ 文書館

The University
of Tokyo
Archives

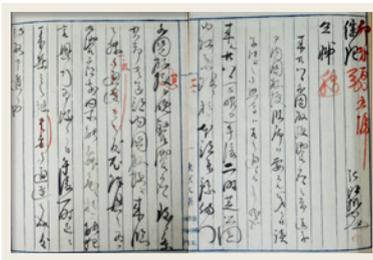


第17回

収蔵する貴重な学内資料から
140年に及ぶ東大の歴史の一部をご紹介します

能狂言で外国人教員を饗応

現在東京タワーが建っている芝公園に、その昔、能楽堂がありました。「紅葉館舞台」と呼ばれた芝公園能楽堂です。芝公園能楽堂が開場したのは明治14（1881）年4月。その約1か月後の5月28日午後2時から、東京大学三学部（法理文）の主催で、外国人教員をもてなすための能狂言の催しが開かれました。当館所蔵の『文部省往復』（S0001/Mo039,040,043,046）に、関連する文書が綴じられています。



そこには、列席する男性は洋服か袴羽織を着用することを明記した文書や、備

品の椅子70脚の借用願などがあり、大学側の様々な配慮が読み取れます。また、この時代のもう一つの学部であった医学部の教授陣にも声かけられ、三宅秀、桐原真節、櫻野（村）清徳、田口和美、橋本綱常、足立寛、永松東海と、その家族が同道を希望したことがわかります。

さて、この日、舞台をつとめたのは誰か。『文部省往復』には出演者や演目の情報はありませんが、日付、「紅葉館」「外国人」というキーワードを手がかりに調べてみると、ある日記にたどりつきます。日記の主は初世梅若実。名人とうたわれ、明治の能楽界を牽引した人物です。彼はこの日のことを「晴。芝紅葉館舞台催。外国人馳走ノ由。午後正二時半始り。上下。」と書きつけていて、『文部省往復』の記述とほぼ一致します。「上下」とは出演者が着用する袴のことで、より正式な舞台であったことが窺えます。

演目は、《橋弁慶》《紅葉狩》《乱》の能三番と、《石神》《花折》の狂言二番。とくに《橋弁慶》の牛若と弁慶の立廻りの場面や、《紅葉狩》の美女から鬼に変貌する趣向は、観客を惹きつけたに違いありません。出演者は梅若実のほか、能では宝生九郎、狂言では野村与作という錚々たる顔ぶれでした。

『文部省往復』を起点として、同時代に書かれた別の記録を手がかりに詳細を手繰り寄せるのも、資料研究の醍醐味でしょう。

（参考：梅若実日記刊行会編『梅若実日記』第三巻）

（学術支援職員・星野厚子）

東京大学文書館

トピックス 全学ホームページの「UTokyo FOCUS」(Features,Articles)に掲載された情報の一覧と、そのいくつかをCLOSE UPとして紹介します。

掲載日	担当部署	タイトル
11月12日	本部入試課	平成31年度東京大学入学者募集要項(前期日程)配布開始
11月12日	先端科学技術研究センター	そのとき、誰もが災害情報を得られるように
11月13日	本部総務課	平成30年度学位記授与式・卒業式について
11月13日 ～12月4日	本部広報課	ネコゲノム解析プラットフォーム ネコモアルツハイマー病にかかる!? ヒトの難病の鍵を握る動物たち 画猫の系譜 - 徽宗・春草・栖鳳 - 野良猫のいる社会としない社会 広報誌「淡青」37号より
11月14日	グローバルキャンパス推進本部 / 本部国際戦略課	東京大学 - スtockホルム大学群 第2回戦略的パートナーシップ合同ワークショップ "Multidisciplinary collaboration for sustainable development" 開催
11月16日	史料編纂所	第6回東アジア史料研究編纂機関国際学術会議への参加
11月16日	広報戦略本部	科学コミュニケーションイベント「サイエンスアゴラ」に東大が出演
11月16日	広報戦略本部 / 政策ビジョン研究センター	ノーベル平和賞が問いかける紛争鉱物と日本の関係
11月19日	本部広報課	平成30年度文化勲章受章・文化功労者顕彰
11月20日	本部社会連携推進課	【参加高校募集】平成30年度「東大の研究室をのぞいてみよう! ~多様な学生を東大に~」プログラム実施のお知らせ
11月22日	医科学研究所 / 生産技術研究所	「The UTokyo NY Conference 2018」を開催しました
11月28日	理学系研究科・理学部	物理学専攻の大小田結貴さんが、英BBC「ことしの女性100人」に選ばれました
11月29日	新領域創成科学研究科	有賀克彦教授がHighly Cited Researchers 2018に選出(物質科学および化学)
11月30日	環境安全本部	平成30年度 総長安全衛生パトロール実施される
11月30日	情報理工学系研究科	東京大学バーチャルリアリティ教育研究センター設立記念式典開催報告
11月30日	本部国際戦略課	東京大学と国連開発計画(UNDP)との包括連携協定調印式および共同シンポジウム「世界を変える~持続可能な未来を協創する東京大学と国連開発計画の挑戦」開催報告
11月30日	教育学研究科・教育学部	大学院教育学研究科・教育学部留学生懇談会の開催
11月30日	教育学研究科・教育学部	大学院教育学研究科・教育学部留学生修学旅行
12月3日	本部学生支援課	アメリカンフットボール部が関東学生アメリカンフットボール連盟1部リーグBIG8優勝!
12月3日	本部広報課	知のバトンゾーンとしての図書館(後編) 総長室だより~第16回
12月4日	本部広報課	柏キャンパス一般公開、行ってみた
12月5日	工学系研究科・工学部	エネルギー・資源フロンティアセンター 加藤泰浩センター長/教授が第28回「日経地球環境技術賞」の最優秀賞を受賞されました。
12月5日	生産技術研究所 / 医科学研究所	「ニューヨークとイノベーションを考える」シンポジウムが開催される
12月5日	産学協創推進本部	東京大学産学連携協議会「アドバイザーボードミーティング」を開催しました



CLOSE UP アメフト部が関東1部リーグBIG8で優勝!

(本部学生支援課)



優勝を決め歓喜に沸く選手たち。おめでとう、WARRIORS!

11月18日、アミノバイタルフィールド(調布市)で開催された関東学生アメリカンフットボール連盟1部リーグBIG8の桜美林大学戦に本学運動会アメリカンフットボール部が勝利し、BIG8優勝を決めました(1部リーグは上位の「TOP8」と下位の「BIG8」に分かれています)。この結果、本学アメフト部のTOP8自動昇格が決定しました。全勝同士の対決となったこの試合、本学アメフト部は開始直後から攻撃陣がテンポ良くランとパスを繋ぎ合わせ、QB#14伊藤宏選手(文・3

年)が自らボールを運んで先制。その後、逆転を許し、9-14で折り返した後半は、LB#42中原選手(教育・3年)が敵のパスをカットするなど、守備陣が活躍。トリックプレーでWR#13瀬戸選手(経済・4年)が60ヤードのタッチダウンを決めて逆転した後、最後までリードを守り、24-21で勝利しました。来季は上位ブロックであるTOP8に参戦することでより厳しい戦いになりますが、今後ともアメフト部を応援いただけますよう、よろしくお願いいたします。



CLOSE UP

The UTokyo NY Conference 2018を開催 (医科学研究所／生産技術研究所)



演者・関係者による集合写真。

11月3日、東京大学ニューヨークオフィス主催、医科学研究所・生産技術研究所共催による“The UTokyo NY Conference 2018”を、ニューヨークの日本クラブタワーで開催しました。カンファレンスは、医科学研究所村上善則所長と東大NYオフィス桑間雄一郎副理事長の開会挨拶で開会。研究所紹介の後の講演会では、医科研清野宏特任教授がコメを用いた次世代型経口ワクチンの開発と臨床応用について、医科研山梨裕司教授は筋萎縮性側索硬化症(ALS)などの神経筋疾患に対する新しい遺伝子治療法の開

発について紹介しました。第2部では、マウント・サイナイ・アイカーン医科大学のThomas Zwaka教授が多能性幹細胞の有効性やジカウイルス感染症の病態解析などに関する最新の知見を披露し、同大のMiriam Merad教授はがんの微小環境とがん免疫療法に関する最先端のデータを紹介しました。最後に生研谷口維紹特任教授から、炎症性疾患や癌に対する新しい治療法の開発についての講演がありました。最後に生研福谷副所長が閉会の辞を述べ、カンファレンスは盛会のうちに終了しました。



CLOSE UP

平成30年度総長安全衛生パトロールを実施

(環境安全本部)



農学部グラウンドを視察する一行。

11月7日、本部が管理する本郷・弥生キャンパスの課外活動施設を対象として、平成30年度総長安全衛生パトロールを実施しました。このパトロールは、総長自らが安全衛生に対する姿勢を示して全学の安全衛生意識を向上させることを目的として、平成18年度より毎年度実施しています。五神総長、松木理事・副学長、石井理事・副学長、光石環境安全本部長ほか環

境安全本部長、教育・学生支援部及び施設部の関係者により、農学部グラウンド・テニスコート、第二食堂建物、御殿下記念館・グラウンド及び七徳堂等の課外活動施設について、管理状況や安全対策等が確認されました。講習会では、五神総長から「安全衛生上の問題があるところについては早急に対応する必要がある」などとコメントをいただきました。



CLOSE UP

VR教育研究センター設立記念式典を挙行 (バーチャルリアリティ教育研究センター)



VRのデモの様子。センターの活動状況はこちらからご覧いただけます。
→ vr.u-tokyo.ac.jp/

11月1日、伊藤国際学術研究センターにて、バーチャルリアリティ(VR)教育研究センター設立記念式典を挙行しました。式典では、石川正俊情報理工学系研究科長の挨拶の後、五神真総長、磯谷桂介文部科学省研究振興局長の祝辞、廣瀬通孝VR教育研究センター長による活動報告、川添雄彦日本電信電話株式会社取締役の基調講演、および、若手研究者による「バーチャルリアリティへの期待」、「バーチャルリア

リティのこれから」と題するパネルディスカッションが行われ、400席弱の会場は、最後は立ち見が出る程盛会の内に式典が終了しました。式典終了後は、多目的スペースにおいて、隈研吾工学系研究科教授と河口洋一郎本学名誉教授の祝辞、および、VR研究のデモンストレーションや展示が行われると共に、研究者・出席者を交えた懇談会が開催され、和やかな雰囲気の中に終了しました。



CLOSE UP

手話や文字表示を取り入れた防災訓練を実施 (先端科学技術研究センター)



挨拶する神崎先生の隣に手話通訳者。モニターの横には音声の誤変換を修正する文字通訳者が。



イーバックチェアを使った避難の様子。

10月24日、生産技術研究所と合同で駒場IIリサーチキャンパス防災訓練を行いました。本年度は、先端研・近藤武夫准教授の提案で、新たに情報保障に対応した取り組みを行いました。一つは手話通訳。目黒消防署長の講評と、生産技術研究所・岸利治所長、先端研・神崎亮平所長の挨拶は手話で通訳されました。もう一つは、文字表示。避難場所のユニバーシティ広場では話者の音声で文字に自動変換し大型モニターで表示しました。内容は事前にダウンロードしたアプリでスマートフォンやタブレット端末に表示できるため、モニターから離れた場所でも手元で確認できます。災害対策本部の全てのアナウンスも文字表示による情報保障を行いました。車いすの人や負傷で動けなくなった人を運ぶ

避難器具「イーバックチェア」を使う訓練も昨年に続き実施。階段降下中と踊り場での取り回しで操作が異なり、体験しないとわからないことがたくさんありました。また、点呼集計を紙の点呼票とタブレット端末の両方で行いました。後者では生産技術研究所の沼田宗純准教授が開発したシステムを活用したことで入力が簡素化され、集計ミスが減るなどが期待されます。今回の訓練には計1,000人以上が参加しました。災害時、身体の不自由な人もいれば、負傷した人もいます。普段と異なる状況だからこそ、皆が速やかに情報を共有し、安全に避難できることが重要です。防災訓練全体の評価を行い、安全で迅速な避難プロセスを構築することで、よりインクルーシブな社会を目指していきます。



王道から横道へ行ってみよう

先日とある学会で、東大出身者が好きなものに関するアンケート結果を発表していた。とにかく日本で一番のものを好きなのだそうである。自動車であればトヨタ、通信会社であればドコモ、野球チームであれば巨人。いかにも主流で王道なものを好む。好きな音楽はもちろんクラシックである。

しかし、日本で主流であり一番であれば必ず良いものであるという時代は終わったのかもしれない。製品やサービス、研究活動や経済活動でも、今まで王道で良いとされてきたものややり方を、一度は疑った方がいい。なぜなら、今まで良かったものがこれからも良いとは限らない。むしろ今まで良かったものが、これからは良くないものになることが大いに予感される。そんな時代になっている。

こんな時代では、東大生や東大出身者も、物わかりが良いだけではなく、世の中から生意気な人間や変わり者に思われるような生き方も求められる。先輩や目上の方が良いと言って勧めることを、たとえ相手が善意で言っている場合でも、すぐには採用しない方がよい。他人の過去の成功体験に基づく話は、鵜呑みにするとなかなか

い。本当にこれからも通用するのか有効であるのか、必ず自分の頭で考えて、自分の目や耳、足で確かめることが肝心だ。今まで良いとされてきた王道であればあるほど違うやり方がないか探す必要がある。案外今まで誰も採用してなかったような非主流のやりの方が、これからは、うまくいくかもしれない。

生意気になるのは大変である。なぜ相手の考えと違うことが良いのか、その証拠を自分で見つけてきて説得しないといけなからだ。コミュニケーション能力も必要となるし、普段から自分が信用されるような行いをしていないといけない。相手の言うことを聞いていた方が、よほど楽なことが多そうだ。でも東大出身者のいいところは、自分の考えと違っていても、論理的に正しければ素直に認めてくれる人が多いことである。だから是非そういった人たちを味方につけられるように、よく調べてよく考えて生意気になってほしいと、いつも学生に対して思っている。

和泉潔
(工学系研究科)